

【査読論文】

サステナブルキャンパスの実現を目指して ～ Impact Rankings 分析と事例研究の視点から～

田中 笑子 (武蔵野大学 看護学部)

鈴木 菜央 (武蔵野大学 工学部)

明石 修 (武蔵野大学 工学部)

要約

気候変動など世界的課題に対して、人々の未来をより良いものにするために大学として貢献することが求められている。この論文の目的は、世界の動向、国内の動向を整理し、本学の位置を確認するとともに、世界的課題の解決に貢献し世界の幸せをカタチにする人材の育成（ハピネスクリエーター）のために求められる取り組み、効果的と考えられる取り組みについて本学の活動と特徴を踏まえて検討することである。

Times Higher Education が発表している Impact Rankings は世界の大学のSDGs への貢献度を評価するものであり、本論文では Impact Rankings に着目して分析と事例研究を行った。大学ごとに戦略や強みなど異なる特徴がみられた一方、上位校はホリスティック（包括的）な視点に立ち、原則・理念を日常生活に落とし込むところにまで至っている点が特徴的であった。本学の理念でもある「四弘誓願」はまさにホリスティックな視点に立つものであり、現在の教育研究活動を発展させることを通じて、上位校同様に理念を個別の活動展開として落とし込み、「いきとし生けるものが幸せになるために」その響創者を育成し、実現していくことが期待される。

1. はじめに

私たちの暮らす地球環境について、Richardson ら（2023）は、気候変動、海洋の酸性化、成層圏のオゾンの破壊、窒素とリンの循環、世界的な淡水利用、土地利用の変化、生物多様性の損失、大気エアロゾルの負荷、化学物質による汚染という9つの「地球の境界（プラネタリー・バウンダリー）」のうち6つが、人々が将来の世代に向けて発展と繁栄を続けられる境界（閾値）を超えていると警鐘

を鳴らしている。このような環境問題に加えて、戦争、格差、コミュニティの希薄化、心の問題など現代社会が抱える課題を克服し、生けるものがいきいきと幸せに暮らすことのできる世界の実現は SDGs に代表される、目指すべき方向性である。これまでの還元主義的な世界観、人間観から、ホリスティック（全体論的）なものを見方を取り戻す視点が必要である（クマール, 2017）。すなわち、自然とのつながり、人とのつながり、自分とのつながりを見つめ直し、取り戻すことが求められている。自然とのつながりは、自分が生態系と一体であり、命の営みに生かされているという感覚を指し、人とのつながりは自分が孤立した存在でなく、他者とのかかわりの中で生かされている存在であるという感覚、自分とのつながりは、身体性や精神性への気づき、自分がかげがえのない存在であるという感覚を意味する。

現代社会は、これらのつながりを断ち切ることで物質的、経済的発展をしてきたと言えるが、結果として環境問題や格差などの問題を引き起こしているのが現状である。個人主義を超えて自然、他者、自分を大事にし、しあわせで持続可能な暮らしや社会をつくるために、自然と人、自分とのつながりをつなぎ直すために、自分と向き合う場、自然や他者と対話する場を創り出すことが求められる。

そのような問題意識のもと、著者らは、武蔵野大学しあわせ研究所の助成を受け、キャンパスの中につながりを取り戻す拠点をつくり、研究・教育活動を展開している。サステナブルキャンパスの実現に向けた取り組み例のひとつには、有明キャンパス3号館屋上におけるコミュニティガーデンの整備がある。教職員や学生、そして地域の人々が協働で自然循環型の菜園づくり、分かち合い、ものづくり等を行う場は、すなわち対話の場である。自然の恵みを実感しながら、他者との関係性の構築や自分を見つめ直す教育活動を展開することは、SDG2「飢餓をゼロに」、SDG10「人や国の不平等をなくそう」、SDG12「つくる責任つかう責任」、SDG15「陸の豊かさを守ろう」といった課題につながる。

国内外の動向に目を向けると、SDGs 実現に向けて各大学独自の取り組みが進む一方、その質を測るための指標も提案され、大学評価として用いられている現状がある。以前から複数のランキングが存在しており、代表例としては Times Higher Education (THE) World University Rankings、Quacquarelli Symonds (QS) World University Rankings などが広く認知されており、大学評価や学生

募集に影響を及ぼしている。近年では、より広範な課題とより良い社会の実現に向けた大学の貢献度に着目した Times Higher Education (THE) Impact Rankings への関心が高まり、日本からの参加も増加している。

Impact Rankings とは、Times Higher Education が発表している世界の大学の SDGs への貢献度を評価するランキングである。2023 年に発表された Impact Rankings 2023 では、世界 115 か国、1705 の大学が参加している。SDGs の達成に向けた大学の取り組み状況を把握する上で、大学関係者だけでなく、政策立案者にとって役立つもの、また進学希望者が進学先を検討する上でも重要な判断材料となりうるものとして注目が高まっている。

この論文の目的は、サステナブルキャンパスの実現に向けて、他大学の取り組みを整理し、今後の取り組みへの示唆を得ることである。世界の動向、国内の動向を整理し、本学の位置を確認するとともに、世界的課題の解決に貢献し世界の幸せをカタチにする人材の育成（ハピネスクリエーター）のために効果的と考えられる取り組みを、本学の活動と特徴を踏まえて検討する。

具体的には、上位校の分析（Impact Rankings と事例）から、外部からの評価軸を明らかにし、現在の活動を再評価する。さらに、本学の理念と現在の活動の特徴を踏まえ、本学の持つ強み（アドバンテージ、潜在力）と今後の取り組みについて提言する。

2. Impact Rankings 分析からみた強みと課題

Impact Rankings では、SDGs の 17 の目標ごとに、研究、管理、アウトリーチ、教育の分野についての指標を用いて評価を行っている（評価指標の詳細は付録に示す）。評価は各大学から提供されるデータや公開情報（例えば、論文のデータベースなど）に基づいて行われる。各大学は 17 目標の中から任意の目標についてデータを提供できるが、総合ランキングには SDGs17（パートナーシップで目標を達成しよう）のスコアと残りの 16 目標のうち上位 3 つの目標のスコアが用いられる。

分析には、Times Higher Education の発行した報告書 Impact Rankings 2023（Times Higher Education, 2023）に記載されている総合ランキング 1 位～1000 位の大学のデータを用いた。だし、武蔵野大学についてはランキング 1000 位以

下であり報告書 Impact Rankings 2023 (Times Higer Education,2023) に記載されていないため、ウェブサイトに記載されているデータを用いた (Times Higer Education,2024)。

総合ランキング 1 位～1000 位の大学について地域別に大学数を集計した結果を表 1 に示す。1 位～1000 位には世界各地域の大学が含まれるが、そのうちアジアの大学は全体の 44.1%を占める。次に多いのはヨーロッパの大学である。しかし、1 位～100 位の上位大学をみるとアジアは 17.6%を占めるにすぎず、ヨーロッパ、北アメリカ、オセアニア (そのほとんどがオーストラリアとニュージーランド) の大学が大半を占める。日本は、100 位以内には北海道大学 (22 位)、京都大学 (49 位) の 2 校、1000 位以内に 47 校がランクインしており、武蔵野大学は 1001 位以下となっている。

表 1 総合ランキング 1 位から 1000 位にランクインしている大学数 (地域別)

	アジア		ヨーロッパ	アフリカ	北アメリカ	ラテンアメリカ	オセアニア
		うち日本					
1-100位	18 17.6%	2 2.0%	35 34.3%	2 2.0%	23 22.5%	2 2.0%	22 21.6%
1-1000位	441 44.1%	47 4.7%	305 30.5%	54 5.4%	69 6.9%	97 9.7%	34 3.4%

先述の通り、Impact Rankings の評価では 17 の目標のうち、SDG17 とその他 3 つ以上の目標について報告を行うことになっているが、どの目標について報告を行うかや、いくつの目標について報告するかは各大学に委ねられている。報告を行っている目標数は、ある程度その大学における SDGs の推進・把握体制を反映していると考えられる。そこで、SDGs17 目標のうちいくつの目標を報告しているかを、順位カテゴリごとに集計し、分析を行った (図 1)。この図をみると、1 位～100 位の大学の報告目標数の中央値は 14.5 (半分の大学は 14.5 以上の目標について報告を行っている)、第 3 四分位数は 17 (3/4 の大学は 17 目標すべてに対して報告を行っている)。一方、801-1000 位の大学の中央値は 7 (半分の大学は 7 つの目標のみしか報告していない) となっている。このことは、下位の大学はより少数の目標に特化した形で SDGs に取り組んでいるのに対し、上位大学は SDGs の多くの目標に対して包括的に取り組む傾向があるこ

とを表わしている。武蔵野大学は、17 目標すべてに対して報告を行っており、1001 位以下という順位からは質的に十分な取り組みを行っているとは言えないものの、包括的な取り組みを目指す姿勢が表れていると言える。

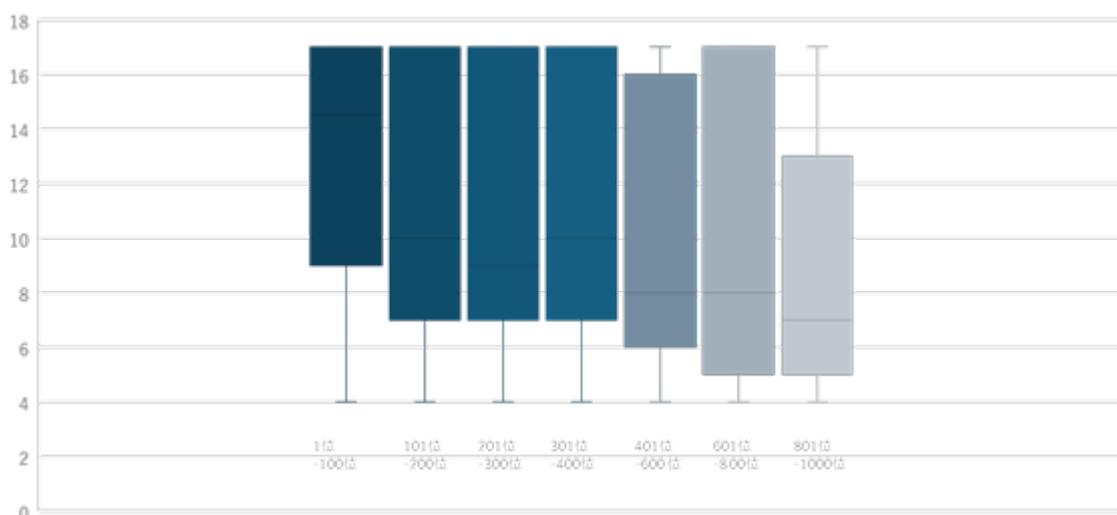


図1 SDGs17 目標のうちデータの報告を行っている目標数（順位カテゴリ別）

さらに、各大学の取り組みの質的な包括性を分析するため、各大学の各目標のスコアのばらつき度合いについて分析を行った（図2）。この分析において、目標間のスコアのばらつきが小さければその大学は比較的偏りが少なく SDGs の各目標に取り組んでいると言える。ここで、ばらつき度合いを表わす指標として変動係数を用いた。

この図をみると順位の高い大学ほど、目標間のばらつきが小さいことが分かる（例えば1位～100位の大学の中央値は0.12であるのに対し、801位～1000位では0.27となっている）。このことは、上位大学ほど偏りなく多くの目標に取り組んでいる、つまり特定の分野に偏ることなく包括的な取り組みを行っていることを示している。

武蔵野大学の変動係数は0.58であり、かなり目標間のばらつきが大きくなっている。前述の通り武蔵野大学は17すべての目標について報告を行っており包括的な取り組みに向う姿勢があるものの、目標間での成果のばらつきが大きく、強い分野とそうでない分野が分かれている状態であると言える。今後より上位

を目指していくためには、質的な面での目標間のばらつきを小さくし、より包括性を高めていく必要があることを表わしている。

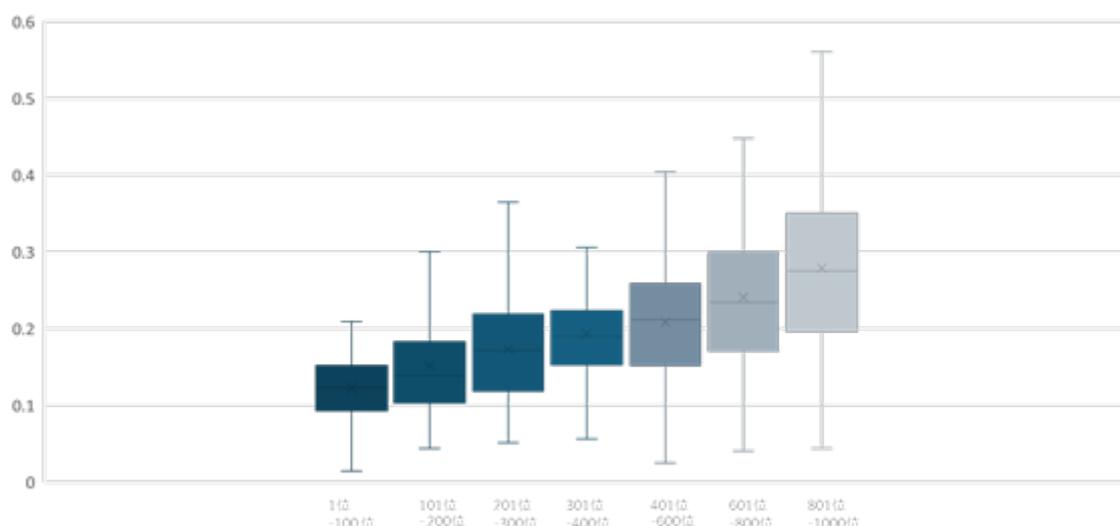


図2 各目標のスコアのばらつき度合い (順位カテゴリ別)

次に、上位の大学特徴と武蔵野大学の位置づけをより理解するために、世界トップ10、アジアトップ10、日本トップ10、日本私立トップ10の大学のスコアを比較した。表2に比較を行った大学のリストを示す。

図3に各大学カテゴリの目標別の平均スコアを示す。これをみると世界トップ10大学は全体的にスコアが高いことが分かる。しかし、SDG9 (産業と技術革新の基盤をつくろう) においては、アジアトップ10、日本トップ10が世界トップ10を逆転している。このことは、アジア、日本のトップ大学においては技術革新のための研究開発や産業界との連携に重きが置かれていることを表わしている。しかし、日本私立トップ10はそれほど高いスコアとなっておらず、国立大学 (日本のトップ10のうち9つは国立大学である) と私立大学で研究開発力に差があることが分かる。

日本のトップ大学 (日本トップ10、日本私立トップ10) において共通する傾向としてSDG5 (ジェンダー平等を実現しよう) のスコアが低いことが挙げられる。SDG5は、女性の教育へのアクセス、女性の上級研究員の割合、女性の地位向上施策 (女性差別撤廃方針、トランスジェンダー差別撤廃施策など) などが評

価値基準になっている。こうしたジェンダー平等は日本社会全体の課題でもあり、大学においてこれらの取り組みを率先して行うことが求められる。武蔵野大学は全体的にスコアが低い傾向があるが、SDG3(すべての人に健康と福祉を)、SDG8(働きがいも経済成長も)については日本私立トップ10よりも高いスコアになっており、これらの項目は武蔵野大学の強みであると言える。

表2 比較を行った大学のリスト

世界トップ10

総合順位	大学名	国
1	Western Sydney University	Australia
2	University of Manchester	United Kingdom
3	Queen's University	Canada
4	Universiti Sains Malaysia	Malaysia
5	University of Tasmania	Australia
6	Arizona State University (Tempe)	United States
7	University of Alberta	Canada
7	RMIT University	Australia
9	Aalborg University	Denmark
9	University of Victoria	Canada
9	Western University	Canada

日本トップ10

総合順位	大学名	国
22	Hokkaido University	Japan
49	Kyoto University	Japan
101-200	Hiroshima University	Japan
101-200	Keio University	Japan
101-200	Kobe University	Japan
101-200	Osaka University	Japan
101-200	Tohoku University	Japan
101-200	University of Tsukuba	Japan
201-300	Kumamoto University	Japan
201-300	Kyushu University	Japan

アジアトップ10

総合順位	大学名	国
4	Universiti Sains Malaysia	Malaysia
14	Yonsei University (Seoul campus)	South Korea
17	Chulalongkorn University	Thailand
20	University of Indonesia	Indonesia
22	Hokkaido University	Japan
24	National Cheng Kung University	Taiwan
38	Mahidol University	Thailand
42	Kyung Hee University	South Korea
42	Kyungpook National University	South Korea
49	Kyoto University	Japan

日本私立トップ10

総合順位	大学名	国
101-200	Keio University	Japan
201-300	Ritsumeikan University	Japan
201-300	Waseda University	Japan
301-400	Tokyo University of Science	Japan
401-600	Ryukoku University	Japan
401-600	Sophia University	Japan
401-600	Teikyo University	Japan
401-600	Tokyo University of Agriculture	Japan
601-800	Chubu University	Japan
601-800	Tokyo City University	Japan

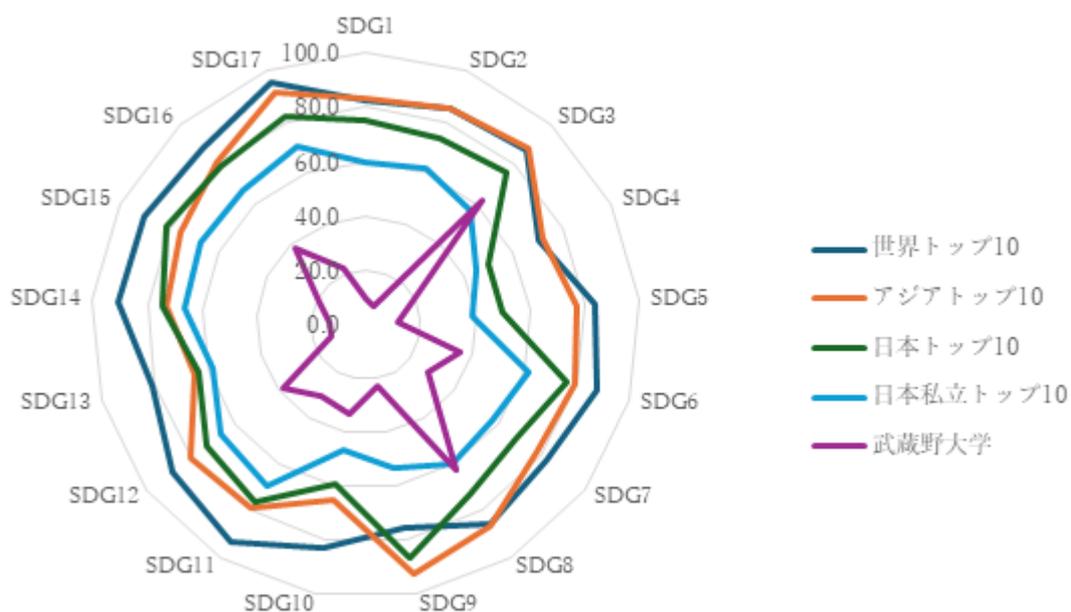


図3 上位大学および武蔵野大学の17目標のスコアの比較

武蔵野大学の強みや課題をさらによくみるために、17目標の各スコアについて、武蔵野大学の平均的スコアに比べてどの程度上回っているか（下回っているか）の分析を行った。具体的には、下記の式を用いて武蔵野大学の各目標の特化度を分析した。この数値が正であれば比較的強い分野、負であれば比較的弱い分野であることを表わす。

$$g_i = \frac{x_i}{\bar{x}} - 1$$

表3 SDGs の 17 目標

SDG1	貧困をなくそう
SDG2	飢餓をゼロに
SDG3	すべての人に健康と福祉を
SDG4	質の高い教育をみんなに
SDG5	ジェンダー平等を実現しよう
SDG6	安全な水とトイレを世界中に
SDG7	エネルギーをみんなに。そしてクリーンに
SDG8	働きがいも経済成長も
SDG9	産業と技術革新の基盤を作ろう
SDG10	人や国の不平等をなくそう
SDG11	住み続けられるまちづくりを
SDG12	つくる責任、つかう責任
SDG13	気候変動に具体的な対策を
SDG14	海の豊かさを守ろう
SDG15	陸の豊かさも守ろう
SDG16	平和と公正をすべての人に
SDG17	パートナーシップで目標を達成しよう

結果を図4に示す。

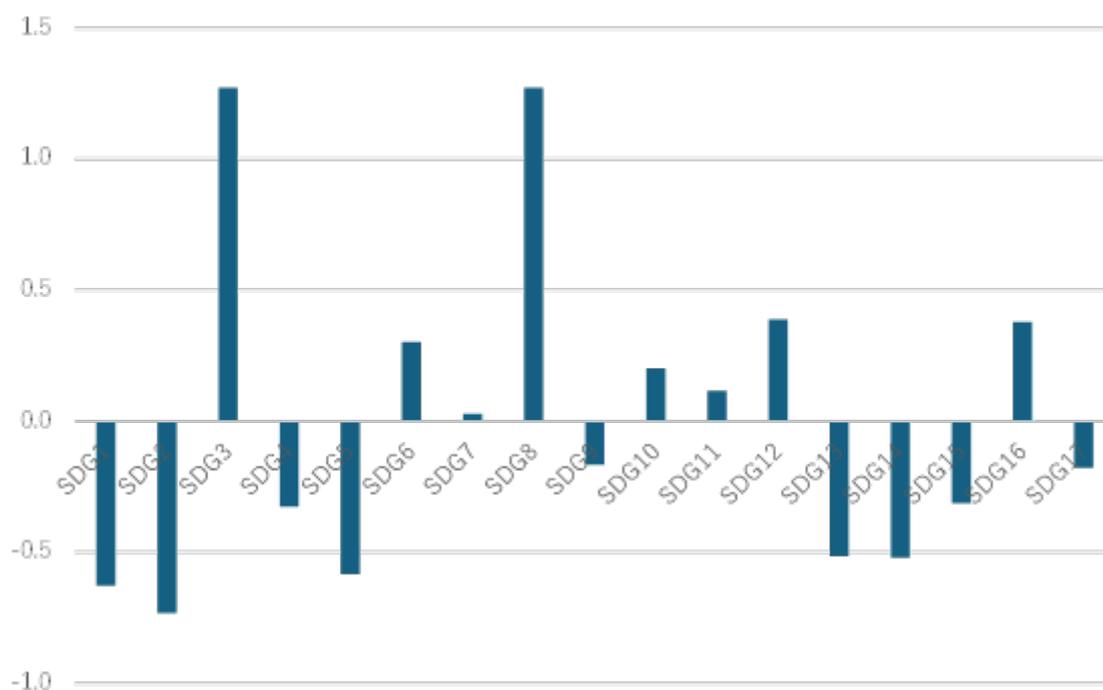


図4 武蔵野大学の 17 目標の特化指数

この図から武蔵野大学の特徴として下記のように整理できる。

• 比較的強い分野

SDG3 すべての人に健康と福祉を

SDG8 働きがいも経済成長も

• 比較的弱い分野

SDG1 貧困をなくそう

SDG2 飢餓をゼロに

SDG5 ジェンダー平等を実現しよう

SDG13 気候変動に具体的な対策を

SDG14 海の豊かさを守ろう

SDG15 陸の豊かさも守ろう

サステナブルな社会に向けての武蔵野大学の貢献をさらに高めていくためには、強みの分野を伸ばしつつ、対策が十分でない分野についてさらに取り組みを進めていく必要がある。現在、比較的弱い分野である SDG 1, 2, 5 は、国際的または地域的な社会課題に対する貢献、在籍する学生や教職員への援助、平等の推進など、SDG13, 14, 15 は、気候変動への対応や生態系保全といった環境問題への対応などが評価基準となっている。これらの分野についてさらに取り組みを進めることでよりサステナブルなキャンパスの実現に向うと考えられる。

3. 事例からみた強みと課題

事例分析は、Impact Rankings（表1）を基に世界上位3校、アジアおよび国内の上位校について、大学ホームページおよび SDGs 白書などの報告書から情報を収集、整理した。大学の戦略と活動および成果から、活動の特徴と成果につながる要因を抽出した結果を報告する。

（1）海外上位校の特徴

海外上位校（トップ3）の基本情報、戦略、事例を表4に示す。

表4 海外上位校の特徴

順位	大学名	評価と戦略	主な事例 (★は参考となる強み)
1	Western Sydney University	<ul style="list-style-type: none"> ・サステナビリティレポート発行 ・「Sustainability and Resilience 2030」戦略として 相互接続的な9つの重点分野設定 (先住民の知恵、生物多様性とウェルビーイングをつなげる再生的システム等) ・戦略的/優先的行動を実施調整するためのガバナンスフレームワーク「CORE」を設定 ・CORE：カリキュラム、運営、研究、エンゲージメント ・GRADUATE ATTRIBUTES (卒業生として身に付けるべき知識・能力)を改訂 	<ul style="list-style-type: none"> ・シニア職員（管理職）の女性比率45% ・リサイクル率91%。使い捨てプラスチックの全廃 ・クライメートポジティブの目標に向け、117ヘクタールの森林を保護 ・オーストラリア最大の全国的気候ユースイベントに400人が参加 ・炭素排出をゼロにすることを旨とするコンソーシアムに1500万ASD投資 ★同大学の「卒業生の資質」を更新し、中心にサステナビリティの能力を置く ・クライメートポジティブ、ネイチャーポジティブとなる目標掲げる ・2022年、再生可能エネルギー100%を達成し、間接排出部門で97%削減を達成 ・大学による先住民（ネイティブ）戦略2020-2025を策定し、先住民企業からの物品、サービス調達を実施 ・大規模山火事をきっかけに、5歳以下の子どもが参加する、生態系の回復を探索する学びの経験に参加 ★長期計画「サステナビリティとレジリエンス2030」策定、進捗を可視化 ★学生、教職員、コミュニティ間の協力関係強化のためデジタルプラットフォーム整備 (89の活動が集まる)
2	University of Manchester	<ul style="list-style-type: none"> ・サステナビリティレポート発行 ・研究、教育、Public Engagement、運営の4分野を通じて実施 ・SDGsの目標17を4つの分野ごとにマトリックス作成し、全分野で積極的に活動 ・研究分野では、SDGsに関連する論文数、引用インパクト、途上国の研究者との共同執筆比率などを発表 ・SDGsの目標ごとに、該当授業数を発表 	<ul style="list-style-type: none"> ★目標13：2038年までのゼロカーボン目標、大学戦略計画で炭素影響を戦略的意思決定の中心に位置づけ ★目標5：ジェンダー給与格差報告書作成、平均収入差を測定し目標設定 ★目標12：廃棄物総量3,980トン中1,600トン(40%)リサイクル ★目標2：学生がゼロ廃棄物ショップ「Want Not Waste」を利用して物資調達し、コミュニティの誰でもが取り出せる「コミュニティ冷蔵庫」運営 ★目標1：ホームレス意識を大学と学生ユニオンが締結、寄付により生活苦にある学生を支援 ★目標6：大学の建物内に41の無料給水機設置 ★目標12：2005年より「認定フェアトレード大学」 ★目標10：多様性と平等な雇用と学生：従業員の6.3%が障がい者であることを開示
3	Queen's University	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGsレポート発行 ・17の目標ごとに、研究とイノベーション、教育と学生生活、コミュニティへの影響、グローバルへの影響という4つの軸で活動をまとめて発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・目標1：法学部学生による法的サービスの提供 ・目標2：地元のフードバンクに寄付 ★目標2：キャンパス内で養蜂とはちみつの提供 ★目標2：食品廃棄物の削減 ★目標2：気候フードの提供 ★目標4：女子中学生のためのSTEM合宿 ・目標5：Women in Science at Queen's (WiSQ) という同大学でのキャリアを探索し、構築するための女性向けの従業員リソースグループの存在 ・目標5：女性およびトランスジェンダーの人々への非差別政策（ポリシー）の策定 ★目標5：女性スタッフのメンターシップ機会と教育支援 ・目標5：ファミリーフレンドリーな大学 ★目標5：学生も利用可能なキャンパス内の保育所 ★目標7：ボトル水の販売禁止 ★目標8：カナダ全国大学気候憲章への署名と報告 ★目標9：全学的な起業支援 ・目標11：キャンパスの脱植民地化と先住民化

1位の Western Sydney University (オーストラリア) は、サステナビリティレポートを発行し、「Sustainability and Resilience 2030」戦略として、9つの相互接続的な重点分野(先住民の知恵、生物多様性とウェルビーイングをつなげ

る再生的システム、都市のレジリエンス、気候アクション、エシカル経済への転換、サステナビリティのための倫理的 AI、食の安全保証と持続可能農業、気候的正義と不平等の解消、地域、国、国際的なコラボレーションの推進)を定めている。また、持続可能性の戦略的および優先的な行動の実施を調整し監視するための分散型ガバナンスフレームワークとして、以下の「CORE (カリキュラム、運営、研究、エンゲージメント)」を設定している。

カリキュラム：21世紀のカリキュラム課題を提供し、SDGの能力を我々のカリキュラムに埋め込み、特定するために取り組むこと

運営：2030年までにカーボンニュートラルの達成

研究：研究プロファイルのSDGsへの影響を示し、ウェスタン大学のTimes Higher Education Impact Rankingsでの地位を確立すること

エンゲージメント：明日のリーダー向けにSDGs2030学校戦略を開発し、持続可能性の研究を進めるための道筋を開発し、コミュニティパートナーと意義ある関係を築くためにCOREの専門知識を活用すること

特に、GRADUATE ATTRIBUTES (卒業生として身に付けるべき知識・能力)を改訂し、より持続可能な未来に有意義な貢献ができる卒業生を輩出すること、持続可能で多様で社会的に公正な世界に貢献できる卒業生を育成することを目指す内容としている。このような戦略的運営と教育の結果として、サステナビリティとレジリエンスに関する長期計画策定、女性管理職比率の向上、リサイクル率91%/使い捨てプラスチックの全廃達成など多様な事例が実行されている。例えば、学生、教職員、コミュニティ間の協力関係強化のためのデジタルプラットフォーム整備は、89の活動を集めることにつながっている。

University of Manchester (2位、英国)は、サステナビリティレポートを発行し、研究、教育、社会貢献、運営の4分野を通じて実行している。マトリックスを作り、4分野すべてにおいて積極的に活動しており、教育に関しては、SDGsの目標ごとに、該当授業数を発表している。多い順に、SDG9は1084授業(うち直接268、間接816)、SDG11は850(直接126、間接724)、SDG3は820(直接505、間接315)である。事例は目標ごとに整理されている。

SDG13：2038年までのゼロカーボン目標、大学戦略計画で炭素影響を戦略的
意思決定の中心に位置づけ

SDG5：ジェンダーによる給与格差について、大学で働く男女の平均収入差を測
定し目標を設定

SDG12：廃棄物総量 3,980 トンのうち 1,600 トン（全体の 40%）のリサイクル
達成、学生がゼロ廃棄物ショップ「Want Not Waste」を利用して物資を調達し、
コミュニティの誰でもが取り出せる「コミュニティ冷蔵庫」を運営

SDG 6：大学の建物内に 41 の無料の給水機設置

SDG12：2005 年から認定フェアトレード大学

SDG10：多様性と平等な雇用に関して、職員の 6.3%が障がい者であることを開示

3 位の Queen's University（カナダ）は、SDGs レポートを発行し、17 の目標
ごとに、研究とイノベーション、教育と学生生活、コミュニティへの影響、グロ
ーバルへの影響という 4 つの軸で活動をまとめて公表する戦略を取っている。
主な事例として、以下が報告されている。

SDG 1：法学部学生による法的サービスの提供

SDG 2：地元のフードバンクへの寄付の他、養蜂とはちみつのキャンパス内で
の提供、食品廃棄物の削減、気候への負荷が少ない食事の選択を支援するため
にクールフードミール導入など

SDG 4：女子中学生への STEM 教育

SDG 5：Women in Science at Queen's（WiSQ）という大学でのキャリアを探
求し、構築するための女性向けの職員支援グループの存在、女性およびトランス
ジェンダーの人々への非差別政策（ポリシー）の策定、女性教職員のメンターシ
ップ機会と教育支援、キャンパスでの学術活動・仕事と子育て・介護の両立を支
援するためのリソース提供やキャンパス内保育所よりファミリーフレンドリー
な大学につながる活動

SDG 7：給水機の設置拡充とボトル詰めの水販売禁止

SDG 8：カナダ全国大学気候憲章への署名と報告

SDG 9：全学的な起業支援

SDG11：キャンパスの脱植民地化と先住民化

上述した上位 3 校に共通する点として、サステナビリティに関するレポートが発行されていること、気候変動への対策や、貧困とジェンダー不平等への対策が具体的かつ長期的計画的であること、大学独自のフレームワークや活動の軸を有していることが挙げられる。また、表現や力点は大学により異なるものの、研究、教育、運営、地域とのパートナーシップも共通していた。SDGs レポートは SDG17 の評価の 27.2% を占めており（付録参照）、かつ SDG17 は必ず計算に用いられる。このため SDGs レポートの作成や、地域とのパートナーシップに上位校ほど取り組んでいるのはある意味当然の結果であろう。一方、理念と行動という視点でみると、2 位、3 位の大学では事例（実行された内容）が SDGs の 17 の目標ごとにまとめられており、個々の活動を SDGs の枠組みにあてはめて整理している状況が伺え、Western Sydney University との違いが明確である。Western Sydney University は、GRADUATE ATTRIBUTES の改訂が示すように、大学教育を通じて世界の課題に貢献する知識・能力を身に着けた人材の育成を重視している点が抜きんでている。すなわち、大学教育の基盤となる理念そのものが要素還元的ではなく包括的であり、その理念が学生の中で咀嚼されることは、世界の課題に目を向け個別の事例（学生自身の選択と実行）につながる。結果として、持続可能でより良い未来に貢献する「循環の仕組み」ができていて、先進的であると言える。

脱植民地化や先住民族への支援、ジェンダー、社会的弱者や経済格差などの不平等に対する取り組みに重点が置かれている点は、先進国のこれまでのアフリカ・アジアなどから搾取・収奪という歴史的背景や文化的問題の影響が伺える。西欧の大学にとって SDGs とは、それらの歴史を評価し直し、その課題を乗り越えることがテーマとなっていると考えられる。

（2）アジア圏の事例

アジアの上位 3 校は、マレーシア科学大学（マレーシア）、延世大学（韓国）、チュラロンコーン大学（タイ）であるが、延世大学は英語での公開情報が乏しく今回はホームページやレポートからの情報収集が困難であった。

マレーシア科学大学は、ペナン州に位置する 1969 年設立の国立大学で、合計 27 の学部を有する総合大学である。学部・大学院合わせて約 3 万人の学生が在籍している。

マレーシア科学大学のサステナビリティ実現に向けた主要な戦略は、以下の 5 つが挙げられている。

- ・ ミッションまたは政策声明を通じて明確にされた持続可能性のビジョン
- ・ 持続可能性の行動計画を策定するための全体的なアプローチ
- ・ 大学の運営や制度のすべての側面における持続可能性の統合
- ・ 創造的で実践的な関与を通じて、形式的小および非形式の学習に持続可能性を組み込む
- ・ 社会の幸福の向上と向上のための持続可能性の文化

事例では、34,751 人の学生のうち、24,598 人の学生が低所得者層出身であり、大学からの奨学金は当然として、地域社会からのザカート（困窮者を助けるための義務的な喜捨）を通じた支援、大学内のイスラミックセンターと学生が主導しての学生同士のランチの支援、地域社会のホームレス支援、経済的困窮層出身学生への多様なケアなど、イスラム的価値観を通じて地域社会へ貢献する様子がみられる。戦略、組織づくりに力を入れ、サステナビリティへの動きを全学的に行うという特徴がみられた。

延世大学は学生数 4 万人、35 学部を有する総合大学であり、英語での情報公開がほとんどみられないが、Impact Rankings の評価は、SDG9（産業と技術革新の基盤をつくろう）が 99 点、SDG12（つくる責任、つかう責任）が 91 点であることが特徴的である。

チュラロンコーン大学は、戦略として教育そのものの SDGs との統合を掲げている。2017 年にチュラロンコーン大学の環境研究所と物理資源管理オフィスが主導する「チュラ・ゼロ・ウェイスト・イニシアチブ」を立ち上げ、第一段階（開始から 2021 年まで）は、大学キャンパスで発生する廃棄物を 30%削減するという目標を立て、廃棄物を減らすだけでなく、消費と廃棄に対する考え方や行動を再構築した。2018 年に発表された「大学における使い捨てプラスチック廃棄物の削減対策」ではキャンパス内のすべての店舗に対し、発泡スチロール容器と酸化型分解性プラスチック製袋（自然環境で分解できると考えられていた

が、最近の研究により分解が不十分であることが指摘されている)の不使用を義務化した。

2021年から2024年までの第2段階では、2025年までに廃棄物交換率75%削減を目標としており、実現のために学生や職員が参加し、周囲の人々、地域社会とのコラボレーションを通じて実施しようとしている。大学は、将来を見据えて学生団体やバンコク市、国連環境計画（UNEP）のような政府間組織と、より協力的な取り組みを行うことを計画しており、チュラロンコーン大学学生自治会（SGCU）は2023年に初めてサステナビリティ部門を設置した。SDGsに関連づけた論文の発表に重点が置かれており、産業と技術基盤づくり、SDG3健康と福祉の評価点が高く、ゼロ・ウェイストに注力している。

アジア圏の上位校では、論文を通じた産業基盤の構築に力を入れている点が共通していた。マレーシア工科大学における経済格差への支援や、チュラロンコーン大学のゼロ・ウェイストへの取り組みはそれぞれ特徴的と考えられる。しかしながら、ホームページや公表されている報告書など確認できた情報には限りがあり、延世大学については英語で公開されている情報が限られている。このため何が各大学の取り組みに影響をしているかという問い、例えば西欧とアジアなど地域性や文化圏、経済発展の状況の違いが及ぼす影響などは、今後さらなる検討が必要と考えられた。

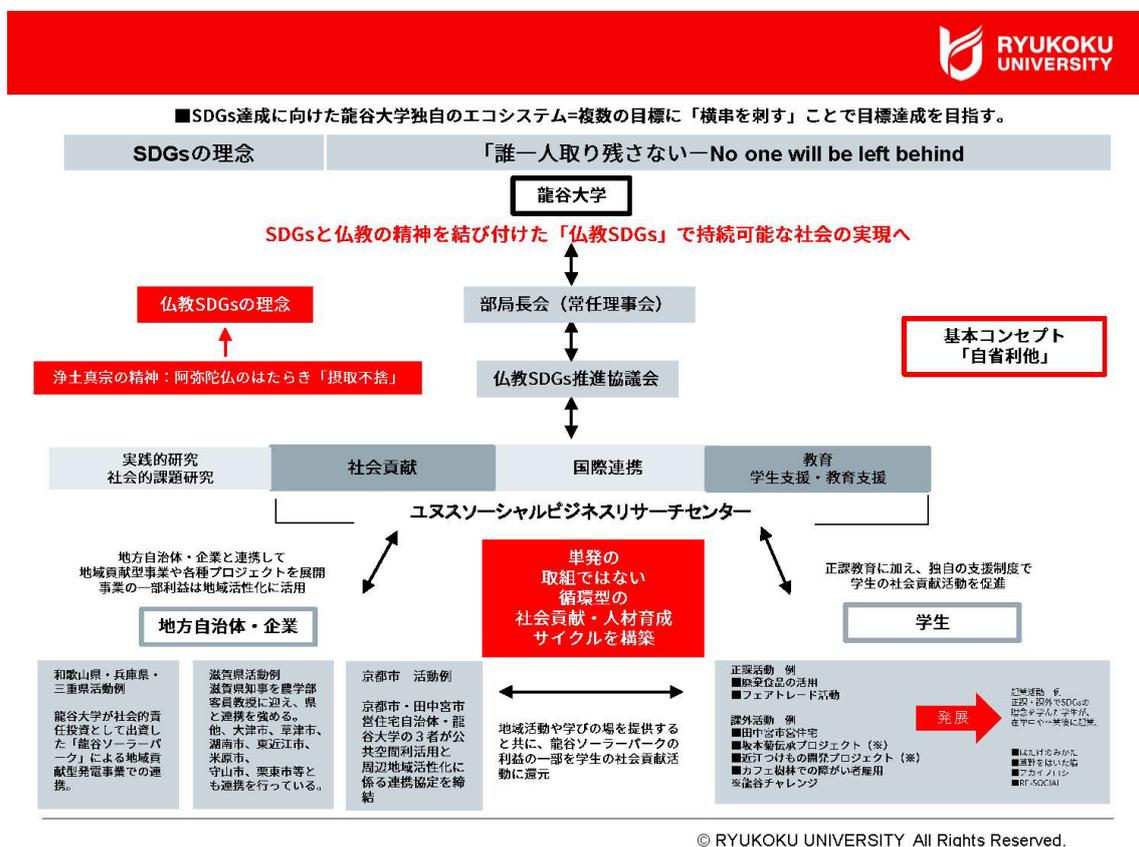
（3）国内の事例

国内の Impact Rankings に目を向けると、国立大学では北海道大学、京都大学などが上位であり、SDG9（産業と技術革新の基盤をつくろう）の評価が高い点は、他のアジア上位校と同じ傾向である。また、パートナーシップとして地域と連携した活動が多いことが特徴である。

私立では慶應義塾大学、立命館大学、龍谷大学、上智大学、東京都市大学などが上位校に名を連ねている。ここでは、武蔵野大学と同じく仏教精神に基づく大学である龍谷大学、首都圏にキャンパスを持つ慶應義塾大学、上智大学、東京都市大学を取り上げる。

龍谷大学の SDGs の理念は、誰一人取り残さないという SDGs の理念と、仏教精神を結び付けた「仏教 SDGs」である。基本コンセプトである「自省利他」

を示し、阿弥陀仏のはたらき「摂取不捨」に基づき、持続可能な社会の実現を目指して大学組織が位置づけられている（図4）。理念を基盤として、研究、社会貢献、国際連携、教育の軸で事例を展開し、仏教的な視点を通して大学構成員自らの自省と気づきを促し、全学的に循環型の社会貢献・人材育成の仕組みを構築しようとする点が特徴的である。SDGs 実践の取り組みは、「環境」「経済」「社会」「パートナーシップ」の4分野に分けて2022年度の主な活動を通じた成果と課題をまとめたレポートがあり、廃棄食品の活用やフェアトレード、和歌山県や滋賀県など地域の自治体とのパートナーシップに基づく活動が展開されている。



© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved.

図4 仏教 SDGs の理念と取り組みスキーム（龍谷大学 HP より引用）

慶應義塾大学では多様な活動に加えて、フランスやイギリスで行われている気候変動対策や温室効果削減対策を国民の側から提言する会議を基に、慶應義塾 SDGs の一環として、学生の意見を本学の SDGs の取り組みに反映させる塾

生会議を開始し、SDGs を実現するための大学のビジョン・目標・ターゲットを提言することを目的として学生主体の活動に力を入れている。

上智大学では、2019 年に「和解と正義のミッションにおいて、排除された人々とともに歩む」「ともに暮らす家」である地球への配慮を協働して行う」などこれから優先的に取り組むべき方向性を UAPs (Universal Apostolic Preferences of the Society of Jesus) 「イエズス会使徒職全体の方向づけ」として定め、これらは大学のサステナビリティ推進に一致し、SDGs とも合致するものとして、理念と教育、実践を統合した取り組みを行っている。「アクティブコモンズ」と呼ばれるアカデミックコモンズ（「学習」と「憩い」と「学生活動」をコンセプトとする、学生の学生による学生のための生きた学びの場）を活用したガーデニングワークショップの開催など、学生のための学びの場を活用しながら、脱炭素の取り組みや、学生組織づくり（ガイド作成など）につなげており、理念を基盤とした教育の展開から実践につなげていく活動は、Creative Learning Square (CLS) など武蔵野大学の取り組みにも応用可能であると考えられる。

また、東京都市大学では太陽光パネルや小型風力発電装置、蓄電池などを設置し、脱炭素の取り組みを進めるとともに、大学間の連携、高等教育における SDGs の取り組みや人財育成、ステークホルダーとのパートナーシップの強化を図っている。

目標 4 の教育に特化した取り組みとしては中部大学が挙げられる（図 5）。中部大学では、育成する人材として、SDGs と環境問題に造詣の深い学生を輩出し、社会で役立つ「あてになる人間」を掲げ、自治体や企業との連携に基づき、地域社会の課題解決に向けた取り組みを強化している。従来の ESD 教育を発展させ、全学を結ぶ SDGs 教育研究環と、3 つの教育圏を設置し SDGs 教育の実践を行っている点は、本学の教養教育の取り組みとも重なる。



図5 SDGsの取り組み（中部大学ホームページより引用）

4. Impact Rankings と事例研究からの示唆

武蔵野大学におけるサステナブルキャンパスの実現に向けて、国際的な評価軸と、国内外の上位校の傾向について、Impact Rankings を用いた分析により、武蔵野大学の強みと課題を検討した。

国際的な評価軸として、研究、卒業する人材の質、学生や職員に対する支援、地域社会とのパートナーシップの重要性が示され、該当する取り組みを確実に報告することの重要性が示された。

上位校の分析（Impact Rankings と事例）から、大学ごとに異なる特徴がみられたが、上位校はサステナビリティに関連するレポートを公表している点や、ホリスティック（包括的）な視点に立ち、原則・理念を日常生活に落とし込むところにまで至っている点が特徴的であった。

武蔵野大学が持つ理念でもある「四弘誓願」はまさにホリスティックな視点に

立つものであり、現在の教育研究活動の発展を通じて、上位校同様に理念を個別の活動展開として落とし込み、「いきとし生けるものが幸せになるために」その響創者を育成し、実現していくことが期待される。上位校の特徴に照らして考えると、大学としての理念、原則を関わる人々にわかりやすく伝える（確立する）ことは、教育・研究を含む学生および教職員の日々の活動、日常生活の中に組み込まれていくことにつながると考えられる。武蔵野大学で行われている事例には、実際に、食の多様性^{注2}や、包括的性教育^{注3}など学生発の問題提起や対話型のイベントを実施した活動例が多様に存在する。理念に基づく教育が学生個人の思考と行動につながっている好例と言える。それらが単発のイベントで終わらずに、例えば学生がフードロス削減の取り組みを学食に求める行動や、ベジタリアンレストラン（香港大学）など学生の食の選択の機会を確保する実効的な環境（スチュワードシップ、アウトリーチ）につながることで、学生主体でよりインパクトが高まることが期待できる。

この点については、すでに武蔵野大学には様々な事例が展開されており、西シドニー大学のようなデジタルプラットフォームの整備は、すでにある事例を有機的につなぎ、学生、教職員、コミュニティ間の協力関係強化につながることを期待できる。

また、SDG3(すべての人に健康と福祉を)、SDG8(働きがいも経済成長も)については日本私立トップ10よりも高いスコアを示し、これらの項目は武蔵野大学の強みであると言える。SDG3に関して、健康を人生の目的ではなく手段、資源として捉え、その先にある幸せ(ウェルビーイング)を高めていくヘルスプロモーションの視点は、国の取り組みとして重要視され、自然と健康になる環境づくりが求められている(厚生労働省, 2023)。加えて、持続可能な健康への取り組みには、地球環境と社会的要因が重要であるとするプラネタリーヘルスの視点への注目が高まっている。Myers(2017)は地球の自然システムの変化は、気候変動、大気や水および土壌の汚染、生物多様性の減少、地球の化学的循環の再構成による複雑な相互作用を通じて健康に影響を及ぼすことを示している。これは、感染症や自然災害への曝露も含まれ、健康への影響は複雑で未知数であるが、環境に働きかける重要性への認識は高まっている。

本学では、すでにしあわせ研究所によりウェルビーイングを高めていく研究

が学部学科の枠を越えて、また学外の研究機関や実践機関と連携しながら推進されている。さらに、教養教育において SDGs に着目した教育が行われていることにより、SDGs は表面的な知識・取り組みではなく大学の理念と結びついたものとして位置づけられていることは、本学の大きな強みと考えられる。SDG8（働きがいも経済成長も）に関しても、自分達を含む人々の未来をより良いものにする取り組みとして、学生や教職員が主体となって様々な実行方法を見出せる可能性がある。

一方、武蔵野大学に限らない、国内共通の傾向として見出された SDG5（ジェンダー平等を実現しよう）のスコアが低いことは、逆に捉えれば積極的に取り組むことで伸ばしやすい、取り組みやすい視点とも言える。武蔵野大学は、築地本願寺において女子教育を起源とした歴史を持ち、女性の教育へのアクセスについて取り組みを重ねてきた大学であり、日本社会全体の課題でもあるジェンダー平等やあらゆる平等にチャレンジすることは 100 周年の節目において人々の未来を拓く行動に他ならない。

他にも、2020 年に世界ランキング 41 位であった香港大学は、SDGs に貢献できるようなリーダーシップや持続可能な開発のための創造的な解決策を提供できる人材育成を教育目標の中に位置づけ、異文化理解や国際市民権に関する教育も含まれている。図書館とコアセンター、女性学研究センターが連携し、パーマカルチャーを用いた屋上庭園のデザインと実践、学生向けワークショップなどの実行につなげており、エディブルな庭園の創出は、SDG 2（飢餓をゼロに）にも関連するとされている。武蔵野大学においても、サステナブルキャンパスの取り組みとして、屋上庭園などの人々の居場所づくりの中で、パーマカルチャーデザインを用いている点は香港大学と同様である。環境への関心を高め、学生自身の関心や意思決定を支援する環境、すなわち対話の場を創り出すことは、学生が自ら問いを持ち、世界に関わる響創者となることを促すと考えられる。

循環を意識してデザインされた対話の場を通じて、あらゆるものはつながり合い、互いに生かし生かされ合っていると気づくことは、本学が取り組む響学スパイラルに基づく学びであり、自発的な活動につながり、最初は小さな気づきであっても、その蓄積こそが「世界の幸せを実現する」と期待される。

一方で、他大学の取り組みについては、ホームページやサステナビリティレポ

ートからの情報収集であり、現地での詳細な調査などは行っていないのが限界点である。本学に所属する海外にルーツやネットワークを持つ教員と連携するなど、本学が有する多様な資源を生かすことで、今後さらなる情報収集と協働的な取り組みを進めていきたい。

リサイクル率向上や炭素排出量の削減などは、国内の大学の多くが弱みとしている点であるが、北海道大学では、サステナビリティ推進機構を立ち上げ、サステナブルキャンパス推進協議会（CAS-Net JAPAN）によるサステナブルキャンパス評価システム（ASSC）などを活用し組織的に取り組んでいる点が評価向上につながっている。全学的な取り組みとすることは簡単ではないが、既存の枠組みを活用することを視野に入れつつ、本学の強みを活かしていくことが重要である。例えば、武蔵野大学ではじゅんぐりセンターなどの新たな取り組みも広がっており、リサイクル率や資源循環の拠点としていくことが期待される。また、世界ランキング1位の西シドニー大学は武蔵野大学の協定校でもあり、すでにある関係性を活かしてサステナブルキャンパス実現に向けた共同研究・教育に発展させていくことが期待できる。SDGs を実現するために個人が持つべき力、コンピテンスとして23のスキルが提唱され、SDGs からIDGs へという流れもみられる。まだ完成形ではなく、アジアの視点が不足していることが言われており、アジアの視点からのフィードバックが求められている。今後は大学間の交流や現地でのフィールド調査などを企画し、互いの取り組みから学び合うことにより、相互作用を引き出し、武蔵野大学における教育研究と実践の取り組みを発展させていきたい。

謝辞

本論文は2023年度しあわせ研究費の助成を受けたものです。

注釈

- 1 2024年3月25日の検索結果による。
- 2 食を通して多様性と持続性を考える地域連携 SDGs イベント～サメ肉専門店・障がい者就労支援施設・学生養蜂プロジェクトチームと協働した取り組み～
<https://sdgs.musashino-u.ac.jp/product/20230301/>

(2024年3月25日アクセス)

3 武蔵野大学で健康づくりの輪を広げる取り組み 「むさしの健幸アンバサダー」とは～自分自身と周囲の大切な人の“健幸”を創り出す力を高めるために～

<https://sdgs.musashino-u.ac.jp/product/20220517/>

(2024年3月25日アクセス)

参考文献

Chulalongkorn University. Chulalongkorn University Sustainability Report 2022-2023.

http://www.sustainability.chula.ac.th/wp-content/uploads/2024/03/CU_SDG_Report2022_23_EBook.pdf

(2024年3月25日アクセス)

Katherine Richardson, Will Steffen, Sarah E Cornell, …Johan Rockström (2023) Earth beyond six of nine planetary boundaries. Sci Adv. 9(37): DOI: 10.1126/sciadv.adh2458 eadh2458.

<https://www.science.org/doi/10.1126/sciadv.adh2458>

(2024年3月25日アクセス)

Myers, S.S., 2017. Planetary health: protecting human health on a rapidly changing planet. The Lancet, 390(10114), pp.2860-2868

Duff H., Faerron Guzmán, C., Almada, A., Golden, C., and Myers, S. “Planetary Health Case Studies: An Anthology of Solutions”. PHA, Boston, USA. 2020;

<https://doi.org/10.5822/phanth9678>

(2024年3月25日アクセス)

Quacquarelli Symonds (QS), QS World University Rankings

<https://www.topuniversities.com/university-rankings>

(2024年3月25日アクセス)

Queen's University. 2023 Queen's contributions to the UN Sustainable Development Goals.

https://www.queensu.ca/social-impact/sites/sdgwww/files/uploaded_files/Queen's_Contributions_to_the_UN_Sustainable_Development_Goals_2022-2023.pdf

(2024年3月25日アクセス)

Times Higher Education (THE), The Times Higher Education (THE) World University Rankings

<https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings>

(2024年3月25日アクセス)

Times Higher Education.(2023). Impact Rankings 2023.

Times Higer Education.(2024, March) . Impact Rankings 2023.

<https://www.timeshighereducation.com/impactrankings>

(2024年3月25日アクセス)

The University of Hong Kong. HKU Libraries and SDGs.

<https://www.hkulsdg.hku.hk/>

(2024年3月25日アクセス)

Universiti Sains Malaysia. Universiti Sains Malaysia Sustainable Development Goals 2022 Report.

<https://www.usm.my/images/sustainability/pdf/SDGREPORT2022.pdf>

(2024年3月25日アクセス)

University of Manchester

<https://documents.manchester.ac.uk/display.aspx?DocID=57219>

(2024年3月25日アクセス)

University of Manchester. THE UNIVERSITY OF MANCHESTER SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 2021/22 REPORT.

<https://documents.manchester.ac.uk/display.aspx?DocID=57219>

(2024年3月25日アクセス)

Western Sydney University

<https://www.westernsydney.edu.au/sustainable-development>

(2024年3月25日アクセス)

Western Sydney University. Unlocking Impact Sustainability Report 2022.

https://westernsydney.edu.au/__data/assets/pdf_file/0009/1991736/2022_Sustainability_Report_Digital_23.pdf

(2024年3月25日アクセス)

慶應義塾大学. 学生の活動

<https://www.global-sdgs.keio.ac.jp/student-activities/>

(2024年3月25日アクセス)

厚生労働省 (2023) 第1回 健康日本21 (第三次) 推進専門委員会. 参考資料2, p7.

<https://www.mhlw.go.jp/content/10904750/001158810.pdf>

(2024年3月25日アクセス)

サティシュ・クマール (2017) 人類はどこへいくのか: ほんとうの転換のための三つのS土・魂・社会.

上智大学. 取り組み事例.

<https://sophia-sdgs.jp/efforts/>

(2024年3月25日アクセス)

中部大学. SDGs の取組み

<https://www.chubu.ac.jp/academics/college-education/all-sdgs/>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

龍谷大学. SDGs の推進体制

<https://www.ryukoku.ac.jp/sdgs/about/system.html>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

北海道大学. サステナビリティ推進機構

<https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/9050/>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

付録 Impact Rankings 2023 における評価基準と配点

- SDG 1 貧困をなくそう
- 貧困に関する研究 (27%)
 - 貧困に関する論文の分野別重み付け引用指数 (10%)
 - 貧困に関する論文数 (10%)
 - 全研究論文のうち、低・中所得国との共著論文の割合 (7%)
 - 学資援助を受けている学生の割合 (27%)
 - 大学の反貧困プログラム (23%)
 - 世帯収入下位 20% の学生の入学目標 (4.6%)
 - 世帯収入下位 20% の学生の卒業・修了目標 (4.6%)
 - 最貧困家庭の学生が大学を修了できような支援 (例えば、食費、住居、交通、法律サービスなど) (4.6%)
 - その国の世帯収入の下位 20% に入る学生が学業を無事修了できよう支援するプログラム (4.6%)
 - 低・中所得国からの貧しい学生を支援する制度 (例えば、無償教育や助成金の提供など) (4.6%)
 - 地域社会の反貧困プログラム (23%)
 - 地域社会における持続可能な事業の立ち上げを支援するための教育やリソース-例えば、メンターシップ・プログラム、トレーニング・ワークショップ、大学施設へのアクセスなど (5.75%)
 - 地域コミュニティにおける持続可能なビジネスの立ち上げを支援するための資金援助 (5.75%)
 - すべての人が基本的なサービスを利用できるようにするための研修やプログラム (5.75%)
 - 貧困をなくすためのプログラムや政策を実施するため、地域、国、世界レベルでの政策立案に参加する (5.75%)
- SDG 2 飢餓をゼロに
- 飢餓に関する研究 (27%)

- Citescore で定義されたジャーナルの上位 10 パーセントに含まれる研究論文の割合 (10%)
- 論文の分野別重み付け引用指数 (10%)
- 論文数 (7%)
- キャンパス内の食品廃棄物 (15.4%)
- 学内の食品廃棄追跡 (7.7%)
- 一人当たりの学内食品廃棄量 (7.7%)
- 学生の飢餓 (19.2%)
- 学生の食糧不足に関するプログラム (4.8%)
- 学生や職員の飢餓を対象とした介入策-例えばフードバンクへのアクセスを提供する (4.8%)
- ベジタリアンやビーガンを含む、キャンパス内のすべての人のための持続可能な食の選択 (4.8%)
- 健康的で手ごろな価格の食品を学内全員に提供する (4.8%)
- 持続可能性の側面を含む農業・養殖業における卒業生の割合 (19.2%)
- 国民の飢餓 (19.2%)
- 食料安全保障や持続可能な農業・養殖業に関する知識、技能、技術を地元の農家や食品生産者に提供する (4.8%)
- 地元の農家や食品生産者がつながらり、知識を交換するためのイベント (4.8%)
- 地元の農家や食品生産者が持続可能な農業慣行を改善するために、大学の施設を利用できるようにする (4.8%)
- 地元の持続可能な供給源からの製品を優先的に購入する (4.8%)
- SDG 3 すべての人に健康と福祉を
- 健康と福祉に関する研究 (27%)
- 閲覧またはダウンロードされた研究論文の割合 (10%)
- 臨床指導に引用された研究論文の割合 (10%)
- 論文発行数 (7%)

- 保健学科卒業生の割合 (34.6%)
- コロナレシジョンと医療サービス (38.4%)
 - 禁煙政策 (8%)
 - 健康と福祉の成果を向上させるための、地域、国、またはグローバルな保健機関との協力 (7%)
 - 避難民や難民を含む、健康と福祉を向上させるための地域コミュニティにおける支援プログラム (7%)
 - 学生のための性と生殖に関する保健サービスへのアクセス (7%)
 - 学生や職員に対するメンタルヘルス支援 (7%)
 - 大学スポーツ施設への地域社会のアクセス (2.4%)
- SDG 4 質の高い教育をみんなに
 - 早期・生涯学習教育に関する研究 (27%)
 - 閲覧またはダウンロードされた研究論文の割合 (10%)
 - Citescore によって定義されたジャーナルの上位 10 パーセントに掲載された研究論文の割合 (10%)
 - 出版数 (7%)
 - 教員資格を有する卒業生の割合 (15.4%)
 - 生涯学習対策 (26.8%)
 - 大学に在籍していない人のための教育資料への無料アクセス (5%)
 - 講義や特定のコースなど、一般に公開されている教育活動 (5%)
 - 大学で学んでいない人を対象に職業訓練を行う教育イベント (5%)
 - 学校を含む地域社会における教育普及活動 (5%)
 - これらの活動が、民族、宗教、障害、移民の有無、性別に関係なく、すべての人に開かれていることを保証する方針 (6.8%)
- 第 1 世代学生の割合 (30.8%)

SDG 5 ジェンダー平等を実現しよう
研究 (27%)

大学の総研究業績に占める女性の著者の割合 (10%)

Citescore によって定義された学術誌の上位 10%における男女共同参画に関する論文の割合 (10%)

男女共同参画に関する出版物の数 (7%)

第一世代の女子学生の割合 (15.4%)

女子学生の教育へのアクセス対策 (15.4%)

女性の出席率、合格率、入学率を組織的に測定・追跡する (1.6%)

女子学生の出席率、合格率、入学率、参加率に取り組み方針 (4.6%)

メンタリングなど、適切な女性アクセス制度の提供 (4.6%)

女性の割合が低い分野への出願奨励 (4.6%)

女性上級研究員の割合 (15.4%)

学位を取得した女性の割合 (11.5%)

女性の地位向上施策 (15.3%)

女性差別撤廃方針 (1.95%)

トランスジェンダー差別撤廃政策 (1.95%)

女性の参画を支援する出産・育児政策 (1.9%)

学生が利用しやすい保育施設 (1.9%)

職員が利用しやすい保育施設 (1.9%)

少なくとも 10%の学生が参加する女性のメンター制度 (1.9%)

女性の卒業率を男性と比較して把握し、その差を埋めるためのスキームがある (1.9%)

差別を報告した人を保護する方針 (1.9%)

- SDG 6 安全な水とトイレを世界中に
- 清潔な水と衛生に関する研究 (27%)
 - Citescore で定義されたジャーナルの上位 10 パーセントに含まれる論文の割合 (10%)
 - 論文の分野別重み付け引用指数 (10%)
 - 論文数 (7%)
 - 水消費量 (19%)
 - 水消費量のトラッキング (9.5%)
 - 一人当たりの水消費量 (9.5%)
 - 水の使用とケア (23%)
 - 廃水処理するプロセス (4.6%)
 - 汚染水が水道システムに入るのを防ぐプロセス (4.6%)
 - 学生、職員、訪問者のための無料の飲料水 (4.6%)
 - 水の使用を最小限にする建築基準 (4.6%)
 - 水の使用を最小限にするための景観の植栽 (4.6%)
 - 水の再利用 (12%)
 - 大学全体で水の再利用を最大化するための方針 (6%)
 - 大学全体で水の再利用を測定する (6%)
 - 地域社会における水 (19%)
 - 地域社会が適切な水管理について学ぶ教育機会 (3.8%)
 - 学内および地域社会で意識的な水の使用を促進する (3.8%)
 - 学外での水保全の支援 (3.8%)
 - キャンパス内外の関連する大学敷地内での持続可能な採水技術 (3.8%)
 - キャンパス内外での持続可能な水採取技術 (3.8%)

水の安全保障に関して、地方、地域、国または世界政府と協力する (3.8%)

SDG 7 エネルギーをみんなに。そしてクリーンに

安価でクリーンなエネルギーに関する研究 (27%)

Citescore で定義されたジャーナルの上位 10%に入る論文の割合 (10%)

論文の分野別重み付け引用指数 (10%)

論文数 (7%)

安価でクリーンなエネルギーに向けた大学の施策 (23%)

すべての改築・新築がエネルギー効率基準に従うことを保証する方針 (3.85%)

既存の建物をより高いエネルギー効率に改善する計画 (3.85%)

カーボンマネジメント及び二酸化炭素排出量削減のためのプロセス (3.85%)

エネルギー消費全体の削減計画 (3.85%)

エネルギーの無駄が最も多い地域を特定するためのレビュー (3.8%)

炭素集約的エネルギー産業、特に石炭と石油からの分離に関する方針 (3.8%)

エネルギー使用 (27%)

エネルギーと地域社会 (23%)

地域社会がエネルギー効率とクリーンエネルギーの重要性を学ぶためのプログラム (4.6%)

大学の枠を越えた再生可能エネルギー100%に関する公約の推進 (4.6%)

地域産業のエネルギー効率とクリーンエネルギーの向上を目的としたサービス (4.6%)

クリーンエネルギーやエネルギーの高い技術に関連する政策立案に関する政府への情報提供と支援 (4.6%)

低炭素経済・技術を育成・支援する新興企業への支援 (4.6%)

- SDG 8 働きがいも経済成長も
経済成長と雇用に関する研究 (27%)
Citescore で定義されたジャーナルの上位 10%に掲載された論文の割合 (14%)
論文数 (13%)
雇用慣行 (19.6%)
教職員への生活賃金の支払い (2.45%)
組合・労働者の権利の承認 (2.45%)
職場における差別撤廃に関する方針 (2.45%)
現代の奴隷制度、強制労働、人身売買、児童労働に対する方針 (2.45%)
外部委託労働者の平等な権利の保証 (2.45%)
給与水準の平等と男女間の賃金格差に関する方針 (2.45%)
給与水準の男女平等の測定と追跡 (2.45%)
従業員が権利や賃金に関する決定に異議を唱えるためのプロセス (2.45%)
従業員 1 人当たりの支出 (15.4%)
職場実習 (ワークプレイズメント) を受ける学生の割合 (19%)
安全な契約を結んでいる従業員の割合 (19%)
- SDG 9 産業と技術革新の基盤を作ろう
産業、イノベーション、インフラに関する研究 (11.6%)
大学の研究を引用した特許 (15.4%)
大学のスピノフ (34.6%)
産業界からの研究収入 (38.4%)

- SDG 10 人や国の不平等をなくそう
- 不平等削減に関する研究 (27%)
 - Citescore で定義されたジャーナルの上位 10%に掲載された論文の割合 (10%)
 - 大学で生産された論文の分野別重み付け引用指数 (10%)
 - 論文数 (7%)
 - 第一世代の学生 (15.5%)
 - 発展途上国からの留学生 (15.5%)
 - 障がいのある学生とスタッフ (23%)
 - 障がいのある学生の割合 (11.5%)
 - 障がいのある従業員の割合 (11.5%)
 - 差別への対策 (19%)
 - 差別のない入学者受入方針 (1.9%)
 - 社会的地位の低い人々の志願率と入学率を追跡調査する (1.9%)
 - 学生や職員に差別的な扱いを受けているグループを採用するための計画的な行動 (1.9%)
 - 職員・学生に対する差別・ハラスメント防止方針 (1.9%)
 - 多様性と平等に関する委員会や役員の存在 (1.9%)
 - 社会的地位の低いグループの学生や職員を対象としたメンタリングやその他の支援プログラムの提供 (1.9%)
 - 障がい者のための利用しやすい施設 (1.9%)
 - 障がい者のための支援サービス (1.9%)
 - 障がい者のためのアクセス制度 (1.9%)
 - 適切な資金提供を含む、障がい者のための宿泊施設方針または戦略 (1.9%)

- SDG 11 住み続けられるまちづくりを
- 持続可能な都市とコミュニティに関する研究 (27%)
 - Citescore で定義された学術誌の上位 10%における論文の割合 (10%)
 - 大学で生産された論文の分野別重み付け引用指数 (10%)
 - 論文数 (7%)
 - 芸術と遺産の支援 (22.6%)
 - 大学内にある文化的に重要な建造物やモニュメント、自然遺産景観の一般公開 (3.75%)
 - 大学図書館の一般利用 (3.75%)
 - 大学の博物館やコレクションの一般公開 (3.75%)
 - オープンスペースや緑地への一般公開 (3.75%)
 - 一般市民を対象としたコンサートなどの芸術的イベントの開催 (3.8%)
 - 地域の遺産を記録・保存する (3.8%)
 - 芸術と遺産への支出 (15.3%)
 - 持続可能な慣行 (35.1%)
 - 持続可能な通勤に関する目標 (3.9%)
 - 持続可能な通勤の促進 (3.9%)
 - 在宅勤務、リモートワーク、短時間勤務の奨励 (3.9%)
 - 学生や職員に手頃な価格の住居を提供する (7.8%)
 - キャンパス内での歩行者優先 (3.9%)
 - 計画的な問題について自治体と協力する (3.9%)
 - 持続可能な基準で建設する (3.9%)
 - 褐色地に建設する (3.9%)

- SDG 12 つくる責任、つかう責任
責任ある消費と生産に関する研究 (27%)
 Citescore で定義された学術誌の上位 10% における論文の割合 (10%)
 大学で生産された論文の分野別重み付け引用指数 (10%)
 論文数 (7%)
運営上の措置 (26.7%)
 商品の倫理的調達に関する方針 (4.8%)
 有害廃棄物の適切な処理に関する方針 (4.8%)
 埋立処分量とリサイクル量の測定に関する方針 (4.8%)
 プラスチックの使用最小化に関する方針 (4.8%)
 使い捨て商品の使用を最小限に抑える方針 (4.8%)
 これらの方針が外部委託サービスにも適用されていることを示す証拠 (1.35%)
 これらの方針が外部委託先にも適用されている証拠 (1.35%)
リサイクル廃棄物の割合 (27%)
 大学全体で発生しリサイクルされた廃棄物の量を測定する (13.5%)
 リサイクルされた廃棄物の割合 (13.5%)
サステナビリティ・レポートの発行 (19.3%)
- SDG 13 気候変動に具体的な対策を
気候変動対策に関する研究 (27%)
 Citescore によって定義されたジャーナルの上位 10 パーセントに掲載された論文の割合 (10%)
 大学で生産された論文の分野別重み付け引用指数 (10%)

- 論文数 (7%)
- 低炭素エネルギー利用 (27%)
 - 低炭素エネルギー使用量の測定 (13.5%)
 - 低炭素電力の割合 (13.5%)
- 環境教育対策 (23%)
 - 気候変動に関する地域教育プログラムやキャンペーンの実施 (4.6%)
 - 自治体や地域社会と共有する大学の気候変動対策計画がある (4.6%)
 - 住民の移住を含む気候変動災害に備えて、地方政府または国家政府と連携して計画を立てる (4.6%)
 - 気候変動に関連する問題について、政府に情報を提供し支援する (4.6%)
 - 気候変動への適応について NGO と協力する (4.6%)
- カーボンニュートラルへのコミットメント (23%)
 - カーボンニュートラルへのコミットメント (11.5%)
 - 達成期限 (11.5%)
- SDG 14 海の豊かさを守ろう
 - 水中の生物に関する研究 (27%)
 - Citescore で定義されたジャーナルの上位 10% に入る論文の割合 (10%)
 - 大学で生産された論文の分野別重み付け引用指数 (10%)
 - 論文数 (7%)
 - 教育による水生生態系の支援 (15.3%)
 - 地域社会または国のコミュニティのための淡水生態系に関する教育プログラム (5.1%)
 - 漁業、養殖業、観光業の持続可能な管理に関する、地域または国のコミュニティ向けの教育または支援活動プログラム (5.1%)
 - 乱獲、無規制漁業、破壊的な漁業慣行についての認識を高めるためのアウトリーチ活動 (5.1%)

- 行動を通じて水生生態系を支援する (19.4%)
- 水域の保全と持続可能な利用を促進するためのイベントを支援または開催する (4.85%)
 - 学内の水産物が持続可能な方法で収穫されることを保証する方針 (4.85%)
 - 研究または産業界との関わりを通じて、既存の生態系とその生物多様性を維持・拡大する (4.85%)
 - 海洋産業が水生生態系へのダメージを防ぐための技術や手法に取り組む (4.85%)
- 水に敏感な廃棄物処理 (19.3%)
- 水質基準と排水ガイドライン (6.45%)
 - 学内のプラスチック廃棄物削減計画 (6.45%)
 - 海洋汚染を防止・削減する方針 (6.4%)
- 地域の生態系を維持する (19%)
- 水生生態系の物理的、化学的、生物学的変化を最小限に抑える計画 (3.8%)
 - 水生生態系の健全性を監視する (3.8%)
 - 水生生態系の管理を奨励するプログラムやインセンティブを開発し支援する (3.8%)
 - 共有の水生生態系を維持するために地域社会と協力する (3.8%)
 - 水生種の多様性に基づいた流域管理戦略 (3.8%)
- SDG 15 陸の豊かさを守ろう
- 陸域生態系に関する研究 (27%)
 - Citescore で定義されたジャーナルの上位 10% に入る論文の割合 (10%)
 - 大学で生産された論文の分野別重み付け引用指数 (10%)
 - 論文数 (7%)
 - 教育を通じて土地の生態系を支援する (23%)
 - 土地の保全と持続可能な利用を促進するためのイベントを支援または開催する (4.6%)

- キャンパス内の食品が持続可能な農法で生産されたものを保証する方針 (4.6%)
 - 既存の生態系とその生物多様性を維持・拡大する (4.6%)
 - 地域や国のコミュニティに対する生態系に関する教育プログラム (4.6%)
 - 農業や観光のための土地の持続可能な管理に関する教育プログラムやアウトリーチ (4.6%)
 - 行動を通じた土地生態系の支援 (27%)
 - 大学に関連する土地生態系の保全、回復、持続可能な利用を確保するための方針 (5.4%)
 - 大学の運営によって影響を受ける絶滅危惧種を特定し、監視し、保護するための方針 (5.4%)
 - 新しい建物の建設など、あらゆる計画や開発プロセスに地域の生物多様性を含める (5.4%)
 - キャンパスにおける外来種の影響を軽減するための方針 (5.4%)
 - 共有地の生態系を維持するために地域社会と協力する (5.4%)
 - 土地に配慮した廃棄物処理 (23%)
 - 水質基準および排水ガイドライン (7.7%)
 - 学内のプラスチック廃棄物削減に関する方針 (7.65%)
 - 有害物質を含む廃棄物処理に関する方針 (7.65%)
- SDG 16 平和と公正をすべての人に
- 平和と正義に関する研究 (27)
 - Citescore によって定義されたジャーナルの上位 10 パーセントに掲載された論文の割合 (10%)
 - 大学で生産された論文の分野別重み付け被引用指数 (10%)
 - 論文数 (7%)
 - 大学のガバナンス対策 (26.6%)
 - 大学の運営組織における選挙による代表 (3.35%)
 - 独立した学生組合の承認 (3.35%)

- 地域のステークホルダーを巻き込む政策 (3.35%)
 - 地域のステークホルダーを巻き込むための参加型組織 (3.35%)
 - 組織犯罪、汚職、賄賂に関する方針 (3.35%)
 - 学問の自由を支援する政策 (6.6%)
 - 大学の財務データの公表 (3.25%)
 - 政府と協力する (23.2%)
 - 政府に専門的なアドバイスを提供する (6.4%)
 - 政策立案者や議員にアウトリーチを提供する (6.4%)
 - 政府部門と協力して政策に焦点を当てた研究を行う (6.4%)
 - 政治関係者が課題について議論するための中立的なプラットフォームを提供する (4%)
 - 法律・民事執行分野の卒業生の割合 (23.2%)
- SDG 17 パートナリシップで目標を達成しよう
- 研究 (27.1%)
 - 低・中所得国出身の共著者がいる学術出版物の割合 (13.55%)
 - 17 の SDGs に関連する出版物の数 (13.55%)
 - 目標を支える関係 (18.5%)
 - SDGs 政策における地域 NGO や政府との関係 (3.7%)
 - 政府や NGO との SDGs に関するセクターを超えた対話 (3.7%)
 - SDGs に関連するデータを収集するために国際的に協力している (3.7%)
 - SDGs に取り組むベネフィットプログラムを開発するために国際的に協力している (3.7%)
 - 学生ボランティアプログラム、研究プログラムまたは教育リソースを通じて、SDGs に取り組むために NGO と協力する (3.7%)
 - SDGs 報告書の発行 (27.2%)

SDGs についての教育 (27.2%)